

学習意欲を高めるための教材を求めて —観光英語の導入に関する一考察—

前 川 智 子*

Searching for Motivational Teaching Materials : Some Considerations on Adopting Travel English

Tomoko MAEKAWA

A survey revealed a number of facts about the author's students, that is, the English proficiency level is relatively low, they want to improve all of the four skills (reading, writing, listening and speaking), they would like to use English in their future jobs and / or to communicate with foreigners, and one of their favorite topics is travel. A text based on travel English could be useful in teaching such students. Authentic materials, which are used in real communicative situations and therefore motivate students to study, could be provided in the text. The topic is real and familiar to them and so is easily understood. English expressions used in the topic are useful, practical and applicable. Authentic materials for travel English can be obtained easily and can be used to improve the four skills. The author therefore set out to find suitable travel-English based textbooks for use in her classes. She reviewed the available texts, but unfortunately none of those assessed seemed appropriate.

1. 緒 論

水を飲みたくない馬を水辺まで引っ張って行くことは出来ても、その馬に水を飲ませることは不可能であるように、外国語を学びたくない学生を教室に1時間座らせておくことは可能であってもその気のない学生にそれを習得させることは至難の業である。従って、いかにして学習する気持ちにさせるか、即ち学習の動機づけが外国語教師の最大の、そして永遠の課題である。

Dulay et al. (1982)¹⁾は、新しい外国語を学ぶ際

にまず直面する内面的な障害は、個人の感情的な状況と（学習する）動機であると、次のように言っている。

When a student is exposed to a new language, the first internal hurdles are posed by the individual's emotional state and motivations. (Dulay et al., 1982, p.4)

外国語習得における「動機」の理論的研究は Brown(1993)²⁾, Williams and Burden(1997)³⁾, Gardner(1985)⁴⁾や Spolsky(1985)⁵⁾等で詳しく論

*言語教育センター講師
1997年11月27日受付

じられているが、その詳細は別の機会に譲るとして、ここでは、いかにすれば動機づけが出来るのかを問題としたい。

全国の中学・高等学校に於ける英語指導助手の大幅な増員や小学校からの英語教育導入計画等は、英語の音に自然に親しませることで、又、コミュニケーションのために英語を学ぶのだという学習目的を明確にすることで、英語への興味を高め学習の動機づけを図ろうとする取り組みである。このようなマクロレベルでの努力以上に重要なのが、個々の教師による指導法、教材等のきめ細かな改善である。これらの改善は学習者の能力、学習に対する考え方、興味、生活環境、学習経験等、様々な要素に応じて考案されるべきものであるから、学習者と直接接する教師の努力にかかってくる。そして多くの外国語教師は、学習者の学習意欲を高めるための良い指導法や教材を求めて日夜努力している。

筆者は1997年4月より本学で英語を担当しているが、学生の英語力は正直言って高くはなく、中には基礎的レベルから始めたほうが良い学生もいる。しかし、かと言って中学生向きのテキストを使用することは、成人とも言える彼らのプライドを傷つけることになり、逆に学習意欲を削ぐことになるので避けるべきである。又、大学生の場合これまでの生活経験、教育的背景（何年間、どの程度英語を学んできたか）、ニーズ、学習意欲、興味等が中学・高校生以上に多種多様なため、クラス全員に適した教材を選ぶのは中々困難である。6カ月間の指導の中で常に筆者を悩ましていたのが、「いかに」よりもむしろ「何を」教えるかであった。即ち、多種多様な要素を持つ、大人である学生全て（1クラス内の）が意欲を持って楽しく学ぶことの出来る教材を探すことであった。

従って小論では、本学の学生の持つ学習要素を分析した上で、それに即した教材はどうあるべきかを考察していこうと思う。尚、アンケート調査により学生の多くが観光英語に興味を持っていることが明らかになったので、観光英語が果たして教材として適しているかどうかを幾つかの観点か

ら考察することにする。

2. 学習要素の分析

2. 1 学習要素

教師が自信を持って指導法や教材を選び学習計画を立てるためには学習者についてのきめ細かな情報を入手する必要があると、Riverse (1981)⁶⁾は次のような点を挙げている。

- 1) 学習者自身について一学習者は何者か/現在に至るまでの経験/将来の希望/余暇時間の過ごし方/外国語学習の姿勢/学習しようとする外国語を話す人々に対する気持ち/学習の理由
- 2) 学ぶ内容の好みについて一主としてオーラル・コミュニケーションを目的としているのか/特定の小説・劇・詩・新聞や雑誌等を読みたいのか/テレビ、ラジオ、映画を理解したいのか
- 3) 学ぶ方法として一オーラル中心かリーディング中心か/講義方式か実践的方法か/集中的か長期的に亘ってなのか/カセットやコンピューターなどの機材を用いたいのかどうか。

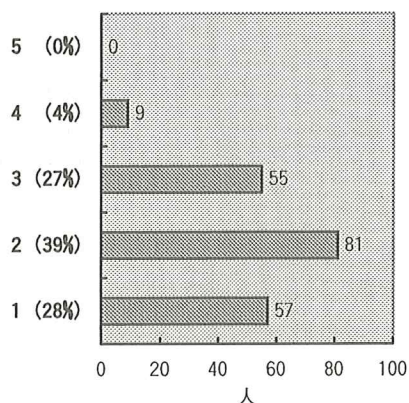
又、Stern (1992)⁷⁾は、カリキュラム作成に際しては学習者個人が何をしたいのかを見極めると同時に、社会が何を要求しているのかを知ることでも大事であると、即ち、社会と個人の動機とニーズを研究する必要があると述べている。

2. 2 本学学生の英語学習の要素

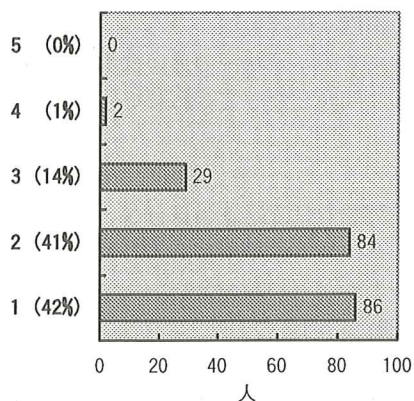
学習状況

本学に於ける外国語教育は必修であり、学生は英語、中国語、フランス語、ドイツ語の中から1つ（或いは2つ）を選択し、一部の学科を除いては原則として1年次で4単位、2年次で4単位習得することとなっている。やはり英語履修希望者が多く、1997年度入学の1年生の場合、英語ⅠAを334人、英語ⅠBを313人、英会話を49人（重複受講。受講申告時点での調査による。）が受講して

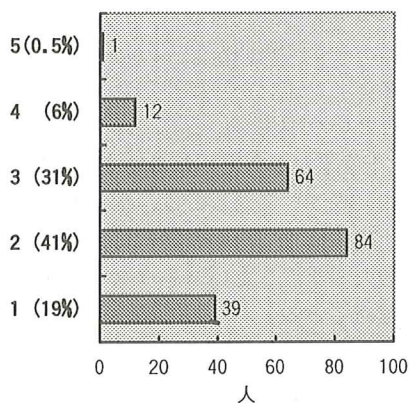
文法力 (206人中 回答なし4人)



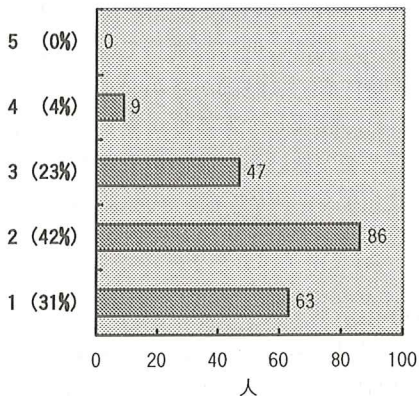
作文力 (206人中 回答なし5人)



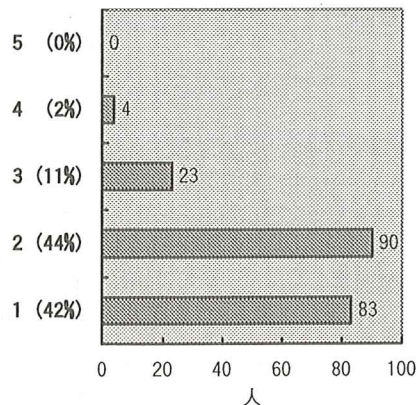
読解力 (206人中 回答なし6人)



聞く力 (206人中 回答なし1人)



話す力 (206人中 回答なし6人)



図：自己診断による学生の英語力
(付録1参照 5：非常に優れている，
4：優れている，3：普通，
2：劣っている，1：非常に劣っている)

いる。一方、学生は全国各地の種々の高校から集まっているため、入学時までを受けて来た英語教育はその程度も内容も様々である。そして、この大学入学までの学習状況の違いは本学での英語指導上大きな問題となって表われている。

到達度

学生の英語力は入学式当日行なったごく基礎的な英語一斉テストの結果にも表われているが、かなり低いようだ(長崎総合科学大学言語教育センター, 1997)。⁸⁾前頁の「図」は筆者が4月の最初の授業の際にアンケート調査した6クラス(1年3クラス, 2年2クラス, 3年以上1クラス)の学生の自己評価による英語力である。全てを平均してみると、73%(206人中150人)が自分の英語力を2又は1(劣っている/非常に劣っている)に該当すると、非常に低く評価しているが、このことは高校時代までに教師からかなり低く評価されてきたことの裏返しであろう。そして実際に指導して来て、この低い自己評価があながち謙遜によるものでもなく、実際の彼らの英語力に近いことが感じられた。

好き嫌い

以下の「表1」が示す通り、英語が嫌い/大嫌いな学生は41%を占めている。英語嫌いの傾向は何も本学だけではなく、他の調査でもかなりの数の学生が英語を学ぶことに嫌悪感や苦痛を感じている。例えば、佐藤(1997)⁹⁾によると、久留米工業大学1年生では67%、久留米高等専門学校1年生では64%の学生が英語を嫌いだと答えている。この調査では好きか嫌いかの二者択一なので「表1」の調査と単純に比較することはできないものの、英語が嫌われているのは本学だけではないことは明らかである。

表1:「英語が好きですか?」(付録1 参照)

大好き	2人 (1%)
好き	22人 (11%)
普通	97人 (47%)
嫌い	69人 (33%)
大嫌い	16人 (8%)
計	206人 (100%)

受講理由

これ程嫌いでも成績も悪かった学生が英語を受講する理由は何であろうか。「表2」によると、半数近い学生が、将来役に立ちそうだという理由で英語を受講している。又、外国語が必修という状況の中で、35%の学生が今更他の外国語をスタートから始めるのは難しそうなので少しでも知っている英語を受けるのだと言っている。(これとは逆に、今まで英語が全く分からなかったもので、同じスタートラインから始めるために他の外国語を選んだという学生もいる。)

一方、「英語力が向上したら何をしたいか?」という質問(表3)に対しては、やはり半数近くが将来の仕事に役立てたいと思っており、34%の学生は外国人と交流したいと思うなど、英語学習の効果を認めている。

表2:大学で英語の授業を受ける理由(付録1 参照)

将来英語が役に立ちそう	99人 (48%)
他の外国語は難しそう	73人 (35%)
英語が好き	8人 (4%)
その他	22人 (11%)
無回答	4人 (2%)
計	206人 (100%)

表3:英語力が向上したら何をしたいか?(付録1 参照)

将来の仕事に役立てたい	93人 (45%)
外国人と交流したい	64人 (31%)
その他	33人 (16%)
無回答	17人 (8%)
計	206人 (100%)

このように多くの学生が、これまで英語の成績が悪く嫌いであったものの、英語が役に立つこと

は事実なので、ここでやり直して英語力をつけ将来の仕事の上で大いに役立てたいし、チャンスがあれば外国人と話して楽しく交流したいと思っているようである。

スキル

特に習得したいスキルについては、「表4」が示す通り、「読む・書く」、「聞く・話す」、「4技能全部」を学びたいという学生の割合はほぼ同じであった。

表4：英語の何のスキルを学びたいのか？（付録1 参照）

読む・書く	58人（28%）
聞く・話す	67人（33%）
4技能全部	66人（32%）
その他	11人（5%）
無回答	4人（2%）
計	206人（100%）

内容（トピック）

さて、これまで見てきたアンケート調査結果は筆者が担当する6クラス全ての学生を対象に、4月の第一回目の授業に於て実施された数字である。同じ6クラスに於て前期の最終回に別のアンケート調査を実施し、英語の授業の題材として取り上げたいトピックを尋ねた。

表5：どのような内容の英語を学びたいか？（付録2 参照）

観光英語	66人
（外国旅行の英語 42人／観光案内 24人）	
スポーツ	52人
日常生活・大学生活	47人
最近のニュース	23人
文化の違い	21人
専門分野	15人
環境保護	10人
アメリカ・イギリス文学等	7人
その他	6人

上の「表5」は、英語の授業でどのような内容のものを題材として取り上げたいかという学生の興味についてのアンケートをまとめたものである（複数回答）。将来の仕事として役立てたいのだけ

ら（表2・3）、専門分野に関係の深い内容をテキストとしたものを使用したいのではないかとの予想に反して、その希望はかなり少数であった。

それに反して、外国旅行での英語や日本にきた外国人に対する道案内や観光案内で使う、いわゆる観光英語を題材として英語を学びたいという希望は66件と断然多かった。得てして、大学生なのだから英語を通して異文化を理解して欲しい、地球の環境も考えてもらいたい、あわよくば専門書を読めるようになって欲しいと願いがちな教師側の期待とは裏腹に、学生は寧ろ日常生活上実践的であり役に立ちそうな観光英語を選んだのに違いない。要するに彼らは楽しく英語を学びたいのであろう。

2.3 まとめ

以上の調査結果から本学学生の英語学習の要素として次のことが言えるだろう。

- 1) 英語力は文法、読む、書く、聞く、話すの全ての分野に於いて弱い。
- 2) 英語は嫌いだが、将来役に立ちそうなので学びたい。
- 3) 機会があれば是非外国人と英語で話をしたい。
- 4) 読む、書く、聞く、話すの全てのスキルを伸ばしたい。
- 5) 観光英語、スポーツ、日常生活など身近な話題を題材として扱ったテキストを使いたい。

このことから、彼らの学習意欲を高めるための一つの試みとして、観光英語の導入がより効果的であると考えられる。その際次の条件を満たす教材を使用することが望ましい。

- 1) 内容は、外国旅行の場面や国内で外国人を案内する場面での、様々な場合の会話表現（空港、ホテル、道案内等）と共に、読解力を高めるために国内外の観光地の説明文などを盛り込んだもの。
- 2) その中で基本的な文法事項を学びながら、読む、書く、聞く、話す作業が十分に行なわれるようになっているもの。

3) しかも使用されている構文は複雑でないこと。

さて、英語を苦手とする学生が意欲を持って授業に望み、基礎力をつけながら英語に対する苦手意識をなくし、英語学習は楽しく役に立つものだということを実感することによって更に意欲的に学習するように仕向けることが、教師の役割である。それにより、将来更に英語を学ぶ必要性が生じた時に抵抗なく英語学習に取り組むことができるようにすることである。そのための手段としてまず、どのような教材に彼らが興味を持っているかを考察した結果、上記のような結論が得られた。そこで次章では、果たして観光英語がテキストとして優れているかどうかを考察したい。

3. 観光英語

3. 1 観光英語とは

観光英語というジャンルは一般化されていないかもしれないが、ここでは次のような場合に使われる英語を意味する。

- 1) 海外旅行中の空港カウンター、ホテル、税関、土産品店、駅などで使用される英語。
- 2) 空港待合室や飛行機内でアナウンスされる英語。
- 3) 外国旅行中の観光案内等で話される英語。
- 4) 観光案内パンフレット等の英語。
- 5) 外国旅行中に生じる様々な場面における会話。
- 6) 国内で外国人に道案内をするときの英語。
- 7) 日本を旅行している外国人に自分の住んでいる地域の施設や名所旧跡を案内する時の英語。
- 8) 国内の観光地についてのパンフレット等の英語。
- 9) 日本の食べ物、習慣、祭り、宗教などを説明する英語。
- 10) 日本や特定の地域についての情報・人口、気候などを質問・説明する英語。

3. 2 観光英語のテキスト性

Authenticity (真正性)

外国語教育の専門家たちは学習活動や教材は authentic であるべきだと随分前から意識しているが、実際に学習活動や教材作成に携わる外国語教師や著者が authenticity を取り入れる想像力を持っているかどうかが問題である (Tudor, 1996)。¹⁰⁾又、authentic material (第一次資料) を教材として使用すべきだと主張する研究者も多い。

では、第一次資料とは何であろうか。Abé et al. (1985)¹¹⁾によると、特定の言語規則を教えるために作られたり手を加えられたテキストは第一次資料ではない。例えば、次のようなテキストは言語規則を示すために意図的に作られたもので authentic ではない (Widdowson 1979)。¹²⁾

Ali and Bashir are brothers. Every morning they get up at five o'clock and wash their hands and face. They have their breakfast at six o'clock. They have an egg and a banana for their breakfast. They had an egg and a banana for their breakfast yesterday morning. They are having an egg and a banana for their breakfast this morning and they will have an egg and a banana for their breakfast tomorrow morning. (p.164)

それに反して、テレビのコマーシャルやニュース、歌、録音された講義や自然な会話等は言語を教える目的で意図的に作られたものではないので音の第一次資料であり、新聞記事、本、雑誌、小説、詩、カタログ、パンフレット、広告等の種々の印刷物はリーディングのための第一次資料であると言える。

では、手を加えたものは第一次資料としては全く通用しないのであろうか。下の引用が示す通り Widdowson の見解では、authenticity とは発信者の意図が受信者に正しく解釈されることであるか

ら、そのためには両者間で言語規則が同じように理解されていなければならない、従って、学習者が正確に理解できるように教育的な手直しも必要だということである。

Authenticity, then, depends on a congruence of the language producer's intentions and language receiver's interpretation, this congruence being effected through a shared knowledge of conventions. ...My argument would be that the pedagogic process must necessarily involve some kind of tampering in order to bring learners to the point at which they can realize the authenticity of the language by appropriate response. (Widdowson 1979, pp.166-168)

第一次資料を使うことについての Abé et al. (1985)を要約すると次のようになる。

- 1) 同じクラスの中で学習者のニーズ、興味、目的等が異なる場合でも学習者個人が自分に合った教材を選ぶことができる。
- 2) 学習者は自分のニーズに合った第一次資料を使用することで、出てくる語彙的、文法的、機能的、かつ推論的な特徴について無駄なく学習することができる。
- 3) 第一次資料（例えば、新聞、雑誌、本、ラジオ放送、レコード、テレビ放映など）は簡単に入手できることから、自主的学習が容易となる。中でも書かれた記録は音の記録に比べると容易に集められる。勿論、そのような記録を集める方法については指導が必要ではある。

言語教育における教師の役割は助言者であり (Brown, 1987)¹³⁾、言語教育をすることによって学習者に自主的な学習力をつけることであるから (Tudor, 1996)、その教材は自主的に学習が出来るようなものが望ましい。従って、学習者自身が自らの興味やニーズに合わせて探し、選ぶことの出来る第一次資料は、理想的な教材だと言えよう。

観光英語について言えば、第一次資料を探すのに骨は折れない。音の教材としては、バス、電車、飛行機内でのアナウンスや会話等があり、書かれた教材としては、国内外の観光パンフレット、観光案内書、新聞や雑誌に掲載されている紀行文等、種類も量も豊富である。しかも比較的容易に入手することができる。

Here-and-now (目の前にある物)

Dulay et al. (1982 p.4)は、言語習得のためには目の前にあるトピックを扱うことが必要だと次のように述べている。

...the acquisition of the basics of a language is best accomplished in contexts where the learner is focused on understanding or expressing an idea, message, or other thought in the new language. Concrete "here-and-now" topics are essential for language acquisition. (Dulay et al., 1982, p.4)

幼児が母語を覚える時、しきりに「これは何？」を繰り返すことでも分かるように、この「目の前のトピック」は特に幼児にとって必要であるが、大人にせよ子供にせよ、外国語を習得しようとしている初心者には必要なものである (同上, pp.28-29)。本学の学生は大人であり、目の前にない事柄も抽象的な概念も理解できる。しかしながら、外国語を学ぶ上ではやはり目の前の物や、知っている食べ物や建物、人物など頭の中で容易に想像できる事柄についてのトピックが理解しやすい。観光英語を教材とする場合、名所旧跡の絵や写真を見せながらそれについてのガイドブックを読んだり、地図を利用して道案内の練習をするなど、目の前にある身近かな物を教材として利用することが多いので学習者の理解は早く、従って英語習得の道も早くなると考えられる。

実用性、応用性、多様性

外国語を学ぶ目的はコミュニケーションを図る

ことであるから、その教材は実際の場面で使用される実用性と、他の類似場面で即応用できる応用性とを兼ね備えておくべきである。

観光英語の大きな特徴は、実用的で応用範囲が広いことである。例えば、京都の金閣寺の説明を読んだ後で、実際に外国人に説明する場面を想定しながら、自分の町にあるお寺の説明文を考えることもできる。観光英語の学習は今後海外旅行の機会が多くなる学生達にとっては非常に身近なものであり、実践的である。そして日本を訪れる外国人の数も増えてきていることから、駅や町中で道を尋ねられたり同じ電車に乗り合わせることも多くなるだろう。そのような場合を設定した会話も、或いは日本の食べ物や祭りについての説明書等も実用的な教材である。

更に、前に述べたように、観光英語の教材を第一次資料の中から選ぶ場合のテキストの形式は多様で、音声教材としても文字教材としても、或いは会話体としても叙述体としても利用できる。そしてこれらは、4技能(読む、書く、聞く、話す)全てのスキルの向上に使用できるので、学習者のニーズに細かく対応することができる。

3. 3 既存テキストの分析

以上のように観光英語がテキストとして適当であることが分かったが、市販されている観光英語のテキストは果たして本学学生のニーズを満たしているであろうか。それを調査するために大学生向きの英語教材を多く扱っている出版社のうち4社の、主として観光英語を内容としている教科書を分析した。この4社が出版している大学生向け教科書は、1998年度用カタログによると総計1,161冊である。目録にある内容要約を手がかりに、主として観光英語中心だと思われるものを選んでみると、わずか16冊(全体の1.4%)しかない。この16冊を入手して分析したところ、テキストの形式は、リスニング用の教材(全て会話体)5冊、会話用教材3冊、リーディング用教材2冊、総合教材6冊である。リスニング、会話中心の教材の内容は全てが海外旅行中の会話であり、飛行

機内、ホテル、銀行、郵便局、電話、レストラン等が場面として設定されている。内容としては、学生が興味を持ち、又、すぐに役に立ちそうな表現が盛り込まれているものの、リスニングや会話練習に片寄っている教材は、4技能全てのスキルを伸ばしたいという本学学生のニーズに合わない。同様の理由からリーディングのみを目的としている2冊の教材も不適当となる。

そこで、残った6冊の教材が本学学生の教材として適しているのかどうかを、彼らの英語力やニーズを鑑みながら、テキストの構成・内容・難易度の面から分析していく。以下はその紹介および書評である。

教科書A(染矢・他, 1989)¹⁴⁾

空港、ホテル、パーティー等、身近な場面を設定した導入部分の説明文とそれに関連した会話文のほかに、1ページ分のアメリカ文化紹介の読物がある。又、その説明文や会話文を基にした聴解力テスト、発音・イントネーション指導用の説明文と録音テープによる指導や練習問題、更にはロールプレイによる会話表現や役に立つ表現の提示・解説、そして歌と、盛りだくさんの内容である。しかし、1度に多くを求めている感が強く、基礎力を養う段階である本学の学生には難しすぎるようだ。

教科書B(染矢・他, 1990)¹⁵⁾

「教科書A」の続編で場面は英国となっている。「アメリカ文化紹介」の代りにアメリカ英語とイギリス英語の違いを発音・意味・文法に亘って説明している点が大きな特色である。前作同様、4技能の向上を狙っているが、英文も長く難しくなっており、本学学生には不適当のようだ。

教科書C(Lander, 1991)¹⁶⁾

教科書名には「会話」という語が用いられているものの、導入部の説明文とそれに続く設問は読解力養成用である。更に、録音テープを利用しての発音練習、会話練習、ロールプレイにより、「聞

く・話す」練習も十分に盛り込んである。通常、ロールプレイも与えられた会話で終わりがちなのであるが、ここでは自由な会話練習が加えられており、言語習得に書かせない創造力養成のための工夫がなされている点は評価できる。最後の「Discussion」用の簡単なテーマは、大きな負担をかけることなく議論できるので、無理なく、日本人学生に欠けている「考える」場を供給している。題材は空港での座席予約、機内で、入国管理、郵便局、ホテル、レストラン、観光等と、実用的な場面と内容が設定されており、使用されている語句や構文も比較的易しいので楽しく学習に取り組めるようである。

教科書D (Nagatomo, 1995)¹⁷⁾

日本人学生がアメリカで留学生活を送る筋書きではあるが、空港、銀行、郵便局、レストラン、テレビ、映画、観光旅行などと身近な場面が多い。「聞く」「話す」を中心としているものの導入部の説明と長めの文で構成されている会話文は「読む」教材となっており、読解力テストもある。「Task Listening」の会話部分がテキストに文字として印刷されていないことに聴解力を養う工夫がされている。又、聴解力テスト用の質問文が短く分かり易いので、無理なく取り組めるようだ。前述の「読み」の部分は少々長い(1ページ余)ものの、平易な文で書かれているので、工夫次第では本学学生にも使用できそうだ。

教科書E (戸・他, 1998)¹⁸⁾

アメリカ東海岸の4都市(ワシントン、ニューヨーク等)を訪問しながら各都市の歴史や文化を学ぶ内容である。1ページの「読む」教材には、かなり難しい語句(注釈付き)が使用されており内容も教育的で難しい。その他、ホテルの予約、ガソリンスタンド、郵便局、買い物等での会話と読解力、聴解力テスト、旅行中に役立つ表現などもある。総合力養成を狙っているものの、全体的に本学学生には難しいようだ。

教科書F (北尾・他, 1995)¹⁹⁾

空港での手続き、ホテル、レストラン、買物、観光等、アメリカ旅行中の実用的な場面を設定している。大きな特色は、教科書のタイトル名にもある通り、第一次資料を教材として取り入れている点である。例えば、入国時に提出する税関申告書や入国カード、ホテル紹介、レストランのメニュー、観光地図等の第一次資料のコピーを載せ、それに関する内容理解テストを付している。内容を理解して必要な情報を手に入れない限りは質問に答えられない訳で、学生はコミュニケーションのために英語を学んでいるのだということを実感できるであろう。ただ、取り上げられている第一次資料には複雑なものも多く、一度も外国へ行ったことのない学生や現在その予定もない学生にとっては、真剣に内容を読み取りたいという意欲が沸かない恐れもある。そのほか、「読む」教材とそれについての読解力テスト、リスニング練習と組み合わせた2種類の会話練習が盛り込まれている。

以上のように、今回調査対象となった1,161冊の英語教科書のうち、これまで述べてきた本学学生の学習要素に照らし合わせてみて適当だと思われる教科書は僅か2冊で、しかもその2冊にも問題が残っている。それについては結論部で言及したい。

4. 結 論

今回の調査では、工学部にも拘らず本学の多くの学生が実用的で応用範囲の広い「観光英語」に強い興味・関心を持っていることが分かった。言語はコミュニケーション(文字・音の両面に於ける)の手段として用いられるのであるから、その教材には作り物ではなく、実際の場で使われる第一次資料を使用すべきだと考える。その点では観光英語は第一次資料の宝庫とも言える。しかしながら、入手したその種の市販教科書に見る限り、第一次資料を教材として積極的に取り入れているものは1件のみであった。更に全体にほぼ共通し

と言えることは、中学・高等学校迄の教科書の流れが引き継がれており、「指示的」傾向の、型にはまったテキストになっている点である。大人の学習者である大学生用の教材としては、もっと自主的学習を導く工夫がほしい。

スキルについては、「読む」「話す」「聞く」については考慮されているものの、「書く」能力を伸ばすことは全く忘れられている。電子メールの発達などで今後益々「書く」コミュニケーション能力も社会的に要求されることを考えると、書くことも含めた4技能全ての能力が向上するよう考察された教科書が望ましい。

題材について見ると、殆どの観光英語テキストが空港・入国・ホテル・タクシー・銀行・観光旅行・レストラン等を取り上げている。実用性・具体性・応用性という面では適しているが、どの教科書も同じ内容であることは淋しい限りである。

観光英語というと海外旅行という認識が強く、国内の身近な題材に目が向けられていないことは残念である。海外旅行ばかりではなく、ひと工夫して他の場面も取り上げるとよい。例えば、自分の町を外国人に案内するという、別の角度からの観光英語教材開発も可能であり、4技能を限なく伸ばす点でも自主性を養う点でも効果的である。例えば長崎であればグラバー園や出島についての英文パンフレットを集め(読む)、そこから、学生自身が各人の興味・英語力に応じた自分用のガイドのテキストを作り(書く)、更にそれを使って擬似現地研修という形での会話場面を想定することができる(話す・聞く)。そしてこのような、自らが考え、探し、作り出していく学習過程を通して、彼らの学習意欲は大いに高まるはずである。とかく与えられ、指示されることに慣れてきた受身的傾向の強い現代の学生に能動的学習方法を指導することは、英語教育のみならず全ての教育に於いて必要だと言える。今回の調査結果を活かし身近にある観光英語の第一次資料を利用した自主性を育てる教材を考案することも、筆者の次の課題に含まれよう。

なお、観光英語を教材として学ぶことが、工学

部である本学の学生の究極の目的ではないことは勿論である。あくまでも英語に対する苦手意識を取り除き、英語学習の楽しさを実感させるための教材のひとつとして観光英語を考察してきたことを改めて強調しておきたい。それにより、将来英語に触れる機会が学生に訪れた時、より抵抗少なく再び英語学習に取り組むことができるようとするものである。又、観光英語は数多くある題材の中のほんの一例にすぎず、他の題材も工夫次第では勿論、良い教材として使用できるであろうことも加筆しておく。

引用文献

- 1) H.Dulay, M.Burt and S.Krashen: *Language Two*, Oxford University Press, (1982) pp.47~51, pp.70~71
- 2) H.D. Brown: *Principles of Language Learning and Teaching*, 3rd. ed., San Francisco State University, (1993) pp.134~161
- 3) M.Williams and R.L.Burden: *Psychology for Language Teachers: a Social Constructivist Approach*, Cambridge University Press, (1997) pp.111~142
- 4) R.C.Gardner: *Social Psychology and Second Language Learning: the Role of Attitudes and Motivation*, London, Edward Arnold, (1985)
- 5) B.Spolsky: *Conditions for Second Language Learning*, Oxford University Press, (1989) pp.148~160
- 6) W.M.Rivers: *Teaching Foreign - Language Skills*, 2nd. ed., The University of Chicago Press, (1981) pp.1-24
- 7) H.H.Stern: *Issues and Options in Language Teaching*, ed. P.Allen and B.Harley, Oxford University Press, (1992)
- 8) 長崎総合科学大学言語教育センター: 『本学学生の大学入学時の英語学力到達度—1997年度新入学生英語一斉テストの結果より—』, (1997)
- 9) 佐藤勇治: 「学ぶ喜びを感じる英語教育についての一研究—学生の経験に学ぶ—」, 『九州英語教育学会紀要』, 第25号 (1997) pp.45~51
- 10) I.Tudor: *Learner-centredness as Language*

- Education*, Cambridge University Press, (1996) p.86
- 11) D.Abé, F.Carton, M.Cembalo and O.Regent: Using authentic documents for pedagogical purposes, *Discourse and Learning*, ed. P. Riley, London, Longman, (1985) pp.321~331
- 12) H.G.Widdowson: *Explorations in Applied Linguistics*, Oxford University Press, (1979) pp.163~172
- 13) H.D.Brown: *Principle of Language Learning and Teaching*, Prinitice Hall Regents, NJ, (1987) pp.60~77
- 14) 染矢正一, F.Ferrasci: 『二郎のアメリカ旅行』, 金星堂 (1989)
- 15) 染矢正一, F.Ferrasci, D. & K.Cosstick: 『二郎のイギリス旅行』, 金星堂, (1990)
- 16) J.Lander: 『異文化体験のための基本英語会話』, 金星堂, (1991)
- 17) D. H. Nagatomo; 『アメリカの留学生活』, 金星堂, (1995)
- 18) 穴戸真, B.Allen: 『アメリカ東海岸探訪』, 成美堂, (1998)
- 19) 北尾S・キャスリーン, 北尾謙治: 『アメリカ実際生活—会話と読解』, 朝日出版社, (1995)

付録 1 : アンケート (1997年 4 月実施) から

1. 今まで、英語の教材が (大好き, 好き, 普通, 嫌い, 大嫌い)
その理由は? ()
2. 大学で英語の授業を受ける理由は
 - a. 他の外国語を始めるのは難しそう。
 - b. 英語が好き (得意)。
 - c. 将来英語が役に立ちそう。
 - d. その他 ()
3. このクラスで特に何を学びたいですか?
 - a. 読む, 書く c. 上の全部
 - b. 聞く, 話す d. その他 ()
4. あなたの英語力を自己診断すると? (5 : 非常に優れている, 4 : 優れている, 3 : 普通, 2 : 劣っている, 1 : 非常に劣っている)

1) 文法力 (5 4 3 2 1)	4) 聞く力 (5 4 3 2 1)
2) 読解力 (5 4 3 2 1)	5) 話す力 (5 4 3 2 1)
3) 作文力 (5 4 3 2 1)	
5. 英語力に自身がつくと, 何をしたいですか?
 - 1) 外国人と交流したい。 3) 英語を教えたい。
 - 2) 将来の仕事に役立てたい。 4) その他 ()

付録 2 : アンケート (1997年 7 月実施) から

英語の授業で, どんなことを学びたいですか?

(難易度は同じだと考えて)

- a 自分の専攻分野に関するトピック
- b 環境保護に関するもの
- c 最近のニュースから
- d スポーツ
- e 観光案内 (外国人への道案内, 名所, 旧跡の案内など)
- f 日本と他の国の文化の違いを扱ったもの
- g 外国旅行の英語
- h 日常生活, 大学生活の英語
- i アメリカ文学, イギリス文学など
- j その他 ()